

ミュンヒハウゼンの物語 —啓蒙時代の旅と笑い—

垣 本 せつ子*

日本では『ほら吹き男爵の冒険』という題名で翻訳されている笑話集の主人公カール・フリードリヒ・ヒエロニムス・ミュンヒハウゼン男爵は18世紀のドイツ・ハノーファー選帝侯国に実在した人物である。笑話集の原型となったのは1781年から83年にかけてベルリンの諷刺雑誌『おもしろ文庫』第八部に書かれた「M-h-s-nの話」であった。この原稿をミュンヒハウゼンと同じくハノーファー出身のエーリヒ・ラスペが1785年、『マンチョーゼン男爵のロシアにおける不思議な旅と出征についてのお話』としてロンドンで英訳出版した。そして同じくハノーファー領内に住んでいたゴットフリート・アウグスト・ビュルガーがこの英訳本を1786年、再びドイツ語に訳し、『ミュンヒハウゼン男爵の水陸にわたる不思議な旅、出征と愉快的な冒険』として出版した。¹⁾ ラスペ、ビュルガーの二人が書いたものが『ほら吹き男爵』のオリジナルである。

イギリスでは初版が出てからラスペが亡くなるまでの9年間に7版を重ねるベストセラーとなった。当初、17話だけであった「M-h-s-nの話」にラスペは「海の冒険」の章を加えた。ドイツ語への再訳が出版される際にはビュルガーも加筆した。その後には無数の「ほら吹き男爵」続編が書かれている。ビュルガーの初版が出て3年後にはシュノルという作家によって、『ミュンヒハウゼン男爵の水陸にわたる不思議な旅』第2部が書かれ、世紀が変わっても改編が引き継がれた。1978年までに出版されたドイツ語による続編、改編は147作、英語版は131作である。²⁾ 今世紀に入ってから有名な改作としては、ケストナーが第二次大戦中、ナチス支配下に上映された映画『ほら男爵の冒険』(1943)のために書いた脚本が挙げられる。元祖『ほら吹き男爵』に続く「ほら吹き男爵」の物語はすべて「ミュンヒハウゼンもの」と呼ばれ、また「ミュンヒハウゼン症候群」という虚言癖の精神障害を表す専門用語も生んだ。

『ほら吹き男爵』のモデルは当初から明らかであったが、作者については『おもしろ文庫』の著者が今日まで不明、ラスペ、ビュルガーは共に生前、匿名を通した。匿名の理由は、滑稽文学の著者を名乗ることがためらわれたこともあるが、話の多くが中世以来の笑話に基づいていたからである。³⁾ このため、『ほら吹き男爵』は中世に流布した民衆本と比較される。⁴⁾ 民衆本は15世紀半ば以降、印刷による出版が可能になって以来、民衆の娯楽を主な目的として書かれた。⁵⁾ 中世に印刷所を持った都市はまだ限られており、読者はその中でも限られた、読み書きができる都市民であった。ティル・オイレンシュピーゲルのいたずらや悪魔と契約をしたファウスト博士の魔術と破滅といっ

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

た一定のテーマを持ち様々なヴァリエーションが加えられるのが特徴である。「ミュンヒハウゼンもの」もほら吹き男爵の荒唐無稽な旅と冒険をテーマとして書き継がれていった。

「ほら吹き男爵」の時代は18世紀であり、民衆本の時代はとうに過ぎている。読者層も変化していた。ビュルガーの『ほら吹き男爵』はゲッティンゲンで出版されるが、ここは中欧全体で出版の中心だったライプチヒと深い関係にあった。ライプチヒは15世紀末に皇帝から年に三度の市を開く勅許を得た古い商業の町であると同時に、1409年創設の大学を持つ文化都市でもある。このライプチヒと、同じく中部ドイツ都市ハレの大学教授がゲッティンゲン大学の開学（1737）に参加した。そしてこの三つの大学とも、ドイツにおける啓蒙主義の拠点を形成したのである。ライプチヒの書籍見本市は啓蒙思想関係の翻訳・著作の成果を見られる場所であった。⁶⁾

カントによる啓蒙主義の定義によれば、理性は誰にでも平等に与えられており、従って誰でも上からの権威による指示を待つのではなく自分自身で考え行動できるはずであり、またそのようにするべきである。⁷⁾ 理性の普遍性からは平等な個人という考え方が生まれ、社会の民主化が志向される。その一つの成果が、大学でのドイツ語による教育の導入に見られた。ドイツで初めてドイツ語で講義を行ったのはライプチヒ大学・ハレ大学の教授トマジウスであり、哲学用語をドイツ語に訳したのも同じくハレ大学教授ヴォルフであった。『ほら吹き男爵』のドイツ語訳者であるビュルガーもまた、ハレ大学で学んだ後、ゲッティンゲン大学で哲学・ドイツ語修辞学を教え、同時にライプチヒで雑誌の刊行に携わる。

啓蒙主義は普遍性を志向する一方で啓蒙絶対主義と呼ばれる統治の手法に化してしまったことも事実である。プロイセンを始めとするドイツの諸邦では、ローマ法王によって権威付けられた神聖ローマ帝国の伝統から離れ近代国家として成長するために、合理性追求の国家学が求められた。宗教における寛容、教育の普及政策にはこの思想の影響が見られるが、民主化・人権思想の発展には自ずと限界があった。フランスにおいて啓蒙思想を担った第三階級が革命の母胎となるのに対して、ドイツの啓蒙主義は階級対立へ導かれる契機を欠いていたのである。『ほら吹き男爵』を取り囲む環境は成長しつつある市民社会とそれを育成した啓蒙思想であり、同時に反・啓蒙的な当時のドイツ事情であった。

以下では、18世紀の市民社会の変質の中でも特に旅の新しい傾向を取り上げ、実在したミュンヒハウゼン男爵の旅と生涯をたどった上で、なぜ彼が笑いの主人公になりえたのか考察したい。ミュンヒハウゼン男爵の伝記に最も近い内容のビュルガー版第一部をテキストに用い、ラスペ版との違いは適宜、注において指摘する。

1. 18世紀の旅

18世紀の市民社会の成長は生活様式の中で身分の区別が解消していくことでも測られる。近代以前の身分社会の規則は日常の衣食住すべてに及ぶものだったからである。生活資材の量が限られている中で、奢侈禁止令は上流の生活を保つためにも必要であった。そして市民社会の生活様式が確立するためには原材料が社会の多くの層に行き渡る程度に確保されることが前提であった。ベッ

ヒャーは18世紀のドイツ食文化の上での大きな変化としてコーヒー、紅茶などの暖かい嗜好飲料と、小麦で作られた白パンの普及を挙げている。ヒルデスハイム司教領では1780年になおコーヒーを貴族以外の階級に禁じる布告が出されるなど、揺れ戻しの例は見られるものの、コーヒーは市民の飲み物と見なされるようになった。反対に、17世紀末に初めてザクセン及びプファルツで救荒植物として栽培されたじゃがいもは18世紀末頃、社会上層の食卓に上る。⁸⁾

奢侈禁止令により身分別に分かれていた生活様式は、禁止令撤廃後は市民社会の価値観に応じた差異を生じることになる。ゆとりの中に自己を表現する志向と、上流志向を戒め節約・儉約を説く市民道徳が衝突する。後者は生存に必要なもの以外は切り捨てる奢侈禁止令と同様の機能を果たしたのである。

市民社会の萌芽と共に、旅も生活の必要に促された旅とゆとりの表現としての旅に分化していった。道路や交通手段、治安がある程度整備されることで、普通の人間にも旅行が可能になることが分化の条件であった。

諸邦に分裂していたドイツでは他国からの脅威を防ぐために旅の条件が意図的に後進状態に放置されていた。ようやく、18世紀半ばに郵便馬車による旅行者輸送の定期便が定着し、道路の改善についての行政側の努力が始まる。ゲーテがワイマール宮廷に仕えてまだ日の浅い頃、就いた役職の一つは「道路建設管理」長であった。⁹⁾ 旅につきものだった不測の事態が取り除かれれば、旅の計画を立てることができる。啓蒙思想も文人間の書物・手紙のやりとり及び旅によって普及したといえよう。

ドイツ語では旅を意味する語は“Reise”である。古高ドイツ語時代の意味は「上方への移動、高揚、上昇」であり、狭義には「戦争へ赴くこと、出征」とされる。16世紀にはまだこの「出征」の意味が用いられ、現代ドイツ語にも、形容詞の“reisig”(武装を整えた)として残っている。また“krieg”(戦争)という語と対句で使われた。騎士の戦闘は十字軍の例に見られるように天上の使命であり、出征は天上へ至る道であり、宗教的な上昇を意味する旅であった。¹⁰⁾

そのような使命を欠いた、単なる生存のための移動は“wandern”(放浪の旅)である。中世の民衆本の主人公ティル・オイレンシュピーゲルは町を巡り職人の見習いをしつつ、お偉方に悪さを仕掛ける。“wandern”の語義は「異邦でさまようこと、在所を持たない、或いは在所から遠く離れている」であり、定住ができない民族、或いは「巡礼者、乞食、渡りの歌手、芸人、商人」といった社会の特定層の暮らしに結びついた語であった。¹¹⁾

17世紀末に“Tour”ということばが「旅」の意味でフランス語からドイツ語に入ってきた。¹²⁾ もともとは「コンパスに似た道具」を意味するギリシア語であり出発地点に戻ってくる移動を意味する。17世紀末といえはいわゆるグランド・ツアー(Grand Tour)が流行した時期であった。これは主にイギリス貴族の子弟がエリート教育の最終段階でパリやイタリア諸都市へ遊学した旅を意味する。英語の“travel”はフランス語の“travail”と同根で「艱難辛苦」を原義としている。¹³⁾ “tour”は特別な人の特別な旅、“travel”は普通の人間が苦労をした旅というニュアンスがそれぞれの語に含まれた。“tourist”という語が使われるようになったのは意外に遅く、英語の文献に登場するのも1800年

になってからという。フランス語経由で1875年頃、ドイツ語へ入ってきたこの語のかつての意味は「裕福で上流、自由な」身分に属し、「楽しみのために、どこといて目的地ももうけず長期に渡り外国に出かける人」であった。¹⁴⁾

“Tour”、“Tourist”共にドイツ語の中で現在に至るまで上記の特別のニュアンスを残し、“Reise”に代わることはなかった。これらの語彙は嫌われ、ドイツ語から取り除かれる傾向もあったという。¹⁵⁾ 他方、“Reise”が含む出征＝冒険と上昇の意味は、宗教色を嫌った18世紀でも“Bildungsreise”（教養旅行）に欠かせなかった。観光業が本格的になる19世紀においても、“Tourist”（観光客）ではなく“Reisender”（旅行者）が教養小説の主人公である。¹⁶⁾

現実には“Tourist”という語の普及以前に、ある種の旅行者への批判が始まっている。フランス、イタリアを旅したスターンは『センチメンタル・ジャーニー』（1768）の中で旅行者（“Traveller”）を「何もしない旅行者、好奇心の強い旅行者、嘘つきの旅行者、傲慢な旅行者、虚栄心の強い旅行者、癩癩持ちの旅行者、やむを得ない旅行者、罪を犯し凶悪な旅行者、不幸だが罪なき旅行者、単純な旅行者」と、スターン自身を指す「感じやすい旅行者」に分類している。¹⁷⁾ そしてその中でもとりわけ「好奇心の強い」旅行者が「名所旧蹟で珍しいものを眺めるためにどんなに多く不正な手段を用いたことか、観察して胸を痛めた」とある。¹⁸⁾ ドイツ国内の旅行者もミーハーぶりを発揮した。『旅行中のゲーテ』によれば、ゲーテが訪れたことを記事とした記念碑は現在でもヨーロッパに100以上残っているが、その中でも中部フランケン地方、グローセンリート村の宿屋などは、ゲーテがスイスへ向かう途中、宿泊し、出立した後、早速、「1797年11月ゲーテが当館で宿泊、すばらしい休息を取った」という看板を正面玄関に掲げたという。¹⁹⁾ 物見遊山の旅行者が群衆の姿で現れ、おもしろおかしく描かれるのは世紀が変わってハイネの『ハルツ紀行』（1824）においてである。詩心を持った旅行者—これはハイネ自身—は騒々しい旅行者に出会う。ブロッケン山の山頂には、登頂者たちが救いようもなく感傷的な詩の数々を書きちらした寄せ書き帳があった。²⁰⁾

必要かくべからざる旅とゆとりの表現としての旅、この二様の旅は、旅の記述に反映される。実用的な目的をもつものと、娯楽としての旅物語である。前者に含まれるのは学術的な価値を持つ旅行記、観光ガイドブックとしてグランド・ツアー用に書かれたフランスやイタリアの諸都市についての旅行記及び何を持って行くべきか、旅先でどのように振る舞うべきかなどの問題を何箇条かにまとめた旅行心得帳である。他方では、旅行文学といえば荒唐無稽な空想の旅が考えられた。18世紀のヨーロッパの空想旅行文学の双壁としてはイギリスの『ロビンソン・クルーソー』（1719）と『ガリヴァー旅行記』（1726）が挙げられる。『ロビンソン・クルーソー』は後続としてヨーロッパ各国に「ロビンソンもの」を生み、²¹⁾ 『ガリヴァー旅行記』にも60年後に『ガリヴァーの再来』（“Guiliver revived”）という後続編が現れた。これはラスペが英訳『ほら吹き男爵』3版につけた題名である。

『ほら吹き男爵』についていえば、ラスペやビュルガーのオリジナル版は実在のミュンヒハウゼン男爵が現実に出かけて行ったロシアへの旅に空想旅行を付け加えた構成になっている。しかしその後の「ミュンヒハウゼンもの」ではミュンヒハウゼンの伝記とは関係なく、南洋や極地などへの空想旅行が大半を占めることとなった。「旅に出かける」という設定が無限の空想を喚起したのである。

『ほら吹き男爵』が『ガリヴァー旅行記』を意識して書かれたことは、英訳版の題名を見れば明らかであるが、内容的にも終章が重なっている。ガリヴァーは巷に出回っている旅行記に以下に嘘が多いか、それに対して自分がいかに真実に忠実であったか誓ってみせるが、²²⁾ ほら吹き男爵もほぼ同じ主張をして語り終える。

旅行者の多くは往々にして、厳密に見れば真実の埒外であることをも大胆不敵に主張する。従って、私の話を読んだり聞いたりした人が少し不信の念を覚えても不思議はない。しかし、もしこの話の信憑性を本当に疑うとすれば、そのような方には私は同情申し上げる。²³⁾

ほら吹き男爵とガリヴァーのちがいはガリヴァーが訪ねた国が現実の地図にはない国であり、男爵が訪ねたのは現実のロシアであった点である。ロシアがほらの発信地として機能したという当時のヨーロッパ往来事情をここに見るべきだろう。

2. ミュンヒハウゼンの旅

カール・フリードリヒ・ヒエロニムス・フォン・ミュンヒハウゼンは1720年にハノーファー領内のボーデンヴェルダールで生まれた。²⁴⁾ ここは1287年に都市の権利を得た古い町であり、ミュンヒハウゼン家もまた12世紀まで系図を遡る古い一族である。ボーデンヴェルダールは現在でも、ニーダーザクセン州に位置する人口六千人の小さな市として残っている。ミュンヒハウゼン家の所領も1870年に同家の手を離れたが、ヒエロニムス（ほら吹き男爵）が生活した屋敷や彼の手になる庭園や東屋は保存されている。同市はブレーメンを出発点としてハーメルンなどを通るドイツ・メルヘン街道という観光ルートの経由地でもある。

ミュンヒハウゼンは四男三女の三男として生を受けるが、4歳にして既に父を亡くす。父の死後は母が所領を経営するが、都市民に対抗して貴族の所領を守ることは決して楽ではなかったようだ。土地の所有をめぐる係争が報告されている。

当時、それほど裕福ではなかった貴族の家の常として、長兄・次兄はともにハノーファーに出て軍務に就いた。1714年にハノーファー選帝侯がスチュアート王朝の跡を継いでイギリス国王になり、主が不在になったハノーファーでは、有力貴族が委託行政を行っていた。その先頭にはミュンヒハウゼン一族のゲルラッハ・アドルフ・フォン・ミュンヒハウゼン宰相がいた。冒頭に紹介したゲッティンゲン大学の創設（1737年）は彼の業績に数えられている。

ほら吹き男爵＝ミュンヒハウゼンもまた12歳で自分の領地を出る。隣のブラウンシュヴァイク公国の宮廷で小姓として仕えるためである。そして18歳の時、同公国のアントン・ウルリッヒ公子の招請があつてペテルブルクに向かう。公子はロシア皇帝の後継者として指名されたアンナ・レオポルドフナのもとへ婿入りしていた。公子の置かれていた立場と当時、ロシア宮廷にいたドイツ人廷臣の権力から言って、ミュンヒハウゼンのロシア行きは出世コースと言って良かっただろう。このロシアへの旅が『ほら吹き男爵』で描かれる。旅は以下のように始まった。

私は真冬にロシアへ向かって家を出ました。どの旅行者も証言するとおり、美德の神殿へ至る道よりもなお険しいドイツ・ポーランド・クールランド・リーヴランドの北方街道も霜と雪が降れば、慈悲深きお上が特別な費用を出さずとも、自ずと修繕されてしまうのです。私は騎馬で旅をしました。馬と騎手さえ良ければこれが一番快適です。ドイツの礼儀正しい郵便駅長と決闘に及ぶこともなければ、のどの渇いた御者に通りかかった居酒屋へいちいち連れこまれる心配ありません。私は軽装で出かけたので、東北へ進むにつれ、寒さが身に応えました。²⁵⁾

このように苛酷な旅は当然グランド・ツアーの対象にもならず、公務や商売でもない限り出かけるであろう。旅を苛酷なものにする第一の要因は天候である。1765年にペテルブルクに滞在したカザノヴァは、当地の天候について次のようなエピソードを残している。その頃エカテリナ2世が十万人を収容する広大な木造円形劇場を作らせた。自分の帝国の騎士全員にそこで馬上試合をやらせようと考えていたのである。

騎馬武者の群は四組に分かれ、その各組には百人の騎士が配置され、彼らは自分たちの国を示す衣装を世にも華々しく着飾り、互いに槍を持って馬上で戦うことになっていたが、この戦いには莫大な賞金がかけられていた。女王の費用で行われることになるはずのこの大がかりな祭典のことは、全帝国内に伝えられた。全国の公爵、伯爵、男爵などの面々は自分たちの見事な駿馬を連れて、最も遠い町々からも既に到着し始めていた。(……) この見事な祝祭が行われる日は、第一に天気の日でなければならないことが決められた。雨も降らず、風も吹かず、また風雨の前兆である雲のない快晴は、ペテルブルグではきわめて稀な現象だったので、この決議ほど賢明なことはなかった。イタリアでは快晴の日が普通なのに、ロシアでは天候の悪い日が普通なのである。(……) この明白きわまりない事実のためについに騎馬試合は行われなかった。²⁶⁾

ほら吹き男爵のほらはこの天候から始まる。旅の途上、ポーランドで会った裸同然の老人にコートをやる話、雪の上で休憩するために馬を繋いだ杭が、翌朝、見てみると教会の尖塔であるとわかる(それだけ雪が積もり、しかも一晩で溶けた)話。寒さのためポスト・ホルン(駅馬車の通行を知らせる)は鳴らず、対抗馬車と立ち往生する。ところが宿屋について一服したとたん、ホルンに凍結していた音が溶けて鳴り出した話。

旅を苛酷にした第二の条件は交通手段と道路の不備である。神聖ローマ帝国においては中世にタクシス家が各宮廷間の通信を請負って以来、同家の独占事業として私的な通信、旅客の運搬を行っていたが、30年戦争による道路事情の悪化でようやくこの体制が崩れた。ハノーファー選帝侯国では1736年以来、郵便事業を侯国政府が行った。²⁷⁾ 一方、道路の状態はほら吹き男爵が通過したドイツ北部で最悪であり、²⁸⁾ その上、バルト沿岸は低地(現在のバルト三国で最高の標高は318m)の湖沼地帯(三国合わせて湖沼は九千個とされる)であった。²⁹⁾ 男爵は一回は坑道に、もう一回は沼に落ちている。

最後に旅の障害となったのは、治安状態もさることながら、旅客業者のサービスの悪さである。ロシアのロマン派詩人カラムジンは1789年5月、ミュンヒハウゼンとは逆に、ペテルブルグを発ってバルト海沿岸経由でドイツにやって来た。彼の残した『ロシア人旅行者の手紙』、6月24日の記事によれば、プロイセンの御者が粗暴であることは旅行者が一致して語るところであり、プロイセン国王も改善命令を発したという。曰く、「駅長は旅客を丁寧にもてなし、1時間以上、駅に足止めに

しないように。御者は道の途中で勝手に休んではいけない」。しかし、現実にはカラムジンのような旅人は、御者が居酒屋でビールを飲むため立ち寄るのを止めることができず、先へ進もうとすればチップをやらざるをえなかった。³⁰⁾

このような苛酷な旅ではあったが、十八世紀に入って、この通路が開かれたのはピョートル大帝の政策のおかげである。大帝は北方戦争(1700-21)の勝利でバルト沿岸諸州を手に入れ、西欧世界への進出を果たした。ペテルブルグはピョートル大帝が1703年に築き、1712年からロシアの首都となった町である。彼はロシア貴族の髭を剃らせ、衣装を西欧風に改めるなど、風俗の西欧化政策も断行した。

フランス革命以前のヨーロッパ各地にフランス文化の浸透により均一的な宮廷社会があったことはよく指摘されるが、ロシアもその例に漏れなかった。宮廷の周辺にはサロンが作られ、女性が中心になってフランス語文化が育成された。啓蒙の世紀、18世紀は「フランスの世紀、“永遠に女性的な”という名前の香水に浸され、満たされた女性の世紀」でもあった。³¹⁾

カザノヴァは、ロシアのフランス熱についてもエピソードを紹介している。ある時、ヴォルテールがロシアのエカテリナ二世に自著を送った。

1ヶ月後に、三千部からなるその全部数が船で運ばれてきたが、それらは一週間でなくなってしまった。フランス語を読むことができるすべてのロシア人が、この本をポケットに入れたからである。(.....)その頃のロシアの文学通は、貴族にせよ軍人の好事家にせよ、知っているのはヴォルテールだけで、彼のもの以外は読みもしなければ、ほめもしなかった。そして、ヴォルテールの発表したいっさいのものを讀んだ彼らは、自分たちの使徒と同じくらいに学者になったつもりでいた。私は彼らに、ヴォルテールがその知識をくみ取った書物を読むべきで、そうすれば恐らくヴォルテール以上の学者になれるだろうと言った。³²⁾

しかし、カザノヴァは同時にペテルブルグの社会について次のような観察も書き残している。

民衆は別にして、ペテルブルグで誰にでも通じる言葉はドイツ語だった。³³⁾

文人の国際的な活躍とそれを支えた宮廷・サロンがヨーロッパのフランス文化化を促進したことは事実であるが、それは社会上層の好みや雰囲気伝える現象であった。これとは別に社会の基層には、隣り合ったドイツ人とスラブ民族の長い交流史が存在した。ビュルガーの描くほら吹き男爵も、ペテルブルグのフランス風サロンに属することはなかった。

私はロシアのこの華麗な首都の制度や芸術、学問やそのほか珍しいことについてのおしゃべりであなた方を退屈させようとは思っておりません。まして、家の女主人がいつでも酒やキスで歓待してくれるあの上品(bon ton)な会合での陰謀や艶ごとなどもってのほか。私は、皆さまが関心を向けられるもっと偉大なもっと高貴な事柄についてお話をしようと思うのです。即ち、私の友達である馬、犬、さらには狐、狼、熊について。この他にも狩りの動物が世界中で最も数多く集まっているのがロシアです。そして最後には遠出や騎士の演習、戦功について。こういったことは少し微がかったギリシア語、ラテン語或いはあのフランスの文人、ちりちり髪洒落者が持っている匂い袋や房や悪ふざけよりよほど貴紳にふさわしい。³⁴⁾

中世に行われたドイツ人の東欧植民の結果、東欧の各地にドイツ人・スラブ系住民・ユダヤ人が

ら混成される地域が散在していた。さらにロシアはピョートル大帝以前においても近代化を推し進めるためにドイツ人の専門家を招請していた。ドイツ・バロック文学を代表する『阿呆物語』（1668）の主人公ジンプリチスムスもロシア軍へ入隊するためにモスクワへやって来たがツァーにより軟禁され、火薬工場を作らされる。³⁵⁾ ロシア周辺地域のドイツ人はロシアの西欧化・近代化政策を担い貴族の家庭教師、軍人・官僚・技術者といった専門家集団としてロシア社会に根を下ろしていたのである。

18世紀のロシアの宮廷革命にはエカテリナ2世即位に至るまでドイツ人が多く関わっている。1740年、アンナ帝が亡くなった後、クールランド（現在のラトヴィア南部）出身のドイツ人貴族であり秘密警察長官であったピロンが摂政となり幼帝イヴァンを即位させる。1ヶ月後、同じくドイツ人の元帥ミュンニヒがクーデターを起こしピロンを追放、このミュンニヒの跡をやはりドイツ人であるオステルマンが継ぐが、ピョートル大帝の娘エリザベータ（在位1741-61）のクーデターにより実権はロマノフ王朝に戻る。1762年に再びクーデターが起きてエカテリナ2世が即位するが、彼女はホルシュタイン家からロシア皇室に嫁いできたドイツ人であった。

ミュンニヒハウゼン男爵はペテルブルクでウルリッヒ公子旗下のブラウンシュヴァイク重騎兵団に入り、騎兵隊旗手、少尉へと昇進していく。しかし、出世はここまでであった。1741年、上述したようにピョートル大帝の庶出の娘エリザベータが宮廷革命を起こす。ミュンニヒハウゼンが仕えたウルリッヒ公子は妻のアンナと息子の幼帝イヴァンともにロシア北端、白海に面したアルハーンゲリスク周辺に幽閉された。夫妻は亡くなるまでその地を離れられなかった。ミュンニヒハウゼン自身、同じ運命に巻き込まれずにすんだのは、当時ペテルブルクを離れていたという僥倖のおかげであった。彼はスウェーデンーロシアの北方戦争が終わった後、リガ（現在のラトヴィアの首都）の駐屯軍に配置されていたのである。元々はドイツ人が建設し中世にはハンザ都市でもあったリガはバルト沿岸州のドイツ人社会の中心地でもあり、彼にとっては居心地が良かったようである。1744年、当地で結婚。一方、出世の方は、1739年に少尉に昇進して以来11年目にしてリガの騎兵大尉に上がる。それが軍を離れるきっかけとなった。1750年、ボーデンヴェルダールの所領を相続する件につき休職を願い出てロシアを離れる。

『ほら吹き男爵』の中では、トルコ戦役に赴き捕虜となった後、ドイツへ帰ったことになっている。

まもなくロシア人はトルコ人と講話を結びました。私は他の捕虜たちと一緒にペテルブルクへ帰されました。私はそこで退役してロシアを離れました。ちょうど約40年前の大革命の時代で、そのとき、まだ揺りかごの中にいらした皇帝は母君、ブラウンシュヴァイク公である父君やミュンニヒ元帥、そのほか大勢の人と共にシベリアへ追放されたのです。³⁶⁾

ドイツへ帰って、後半生はボーデンヴェルダールの地主として生きた。しかしそこも決して平和な時代ではなかった。ボーデンヴェルダールが位置するハノーファーの選帝侯はイギリス国王が兼ねていたが、ハノーファーの行政は有力貴族が握っていた。イギリスにとっては大陸における勢力拡張の拠点ではなく、アキレス腱であった。ミュンニヒハウゼンが帰郷してから6年後に7年戦争が始ま

る。「ハノーファー戦争」とも呼ばれるこの戦争で、イギリスがプロイセンの側についたため、ハノーファーはフランス軍とプロイセン軍の争奪の対象となった。ボーデンヴェルダーはフランス軍に占領された。さらにフランス軍以上の扮争の種もあった。「フランスの殿方」以上に平和を乱すのは同郷の市民と市長であるというミュンヒハウゼンの手紙が残されている。私生活の上では74歳にして17歳の少女と再婚、すぐに離婚するという騒ぎもあったが、1797年にこの生地で77歳の天寿を全うした。亡くなって6年後、今度はナポレオンが率いるフランス軍が選帝侯国を占領し、ナポレオンのベルリン入城への道が開かれる。

ミュンヒハウゼンの生涯は前半生も後半生もユンカーの人生と呼べるであろう。ユンカーとは歴史概念では「エルベ川以東の東部ドイツにおける土地貴族」とされるが、一般にはもっと広い意味で使われていた。ユンカーは“junger Herr”をつづめた語で中高ドイツ語では「若殿」、即ち貴族の息子を意味した。そして、貴族の息子は修行のために宮廷に仕えることが常であったから、宮廷における貴族出身の従僕、小姓などもやはりユンカー、「若殿」と呼ばれたのである。³⁷⁾ ミュンヒハウゼンの前半生は中世以来の貴族・騎士階級の伝統的な生き方である。ロシアへ向かったの旅は放浪でも物見遊山でもなく、宮廷の公務という選ばれた者の旅である。ところが後半生では、地主階級ユンカーとして小都市民の中で生きることになる。ここでは貴族の特権に対して敏感な反応が返ってきた。ロシア軍役に離れて故郷へ帰っても、戦争と革命は続き、己の階級の没落を味わわなければならなかった。『ほら吹き男爵』の出版もまた本人の与り知らないことであり、市民階級によってつけられたほら吹き男爵（ドイツ語では“Lügenbaron”「嘘つき男爵」）という称号は本人を憤慨させたという。

ミュンヒハウゼンの笑いの背景にあるのは厳寒のロシアへの旅行と出世から外れた外国人士官暮らし、そしてロシア及びドイツ本国でも経験した戦争という殺伐とした風景である。

3. 啓蒙の笑い

『ほら吹き男爵』の話は以下にその内訳を挙げるように、そのほとんどが、旅行や狩猟、戦争中に起こっている。

旅の途中の話……5話　落ちる話……2話　狩りの成功話……10話、
猛獣との遭遇、捕獲、或いは逃げる話……7話　戦争の笑い……4話
ロシアの将軍……1話　月旅行……1話

『おもしろ文庫』に掲載された『ほら吹き男爵』の原型はこれらの話の一部が小咄としてばらばらに羅列されたものである。ラスペは、これらを男爵の思い出話としてまとめて英訳出版した。男爵はローマからロシアへ出発したようになっていて、特にドイツ人と特定することもできない。ドイツ語へ再翻訳したビュルガーが初めてミュンヒハウゼン男爵を笑話の主人公として定着させたのである。ビュルガー版が書かれたのは1786年であり、ミュンヒハウゼン男爵のロシアへの旅より一世代が過ぎている。当時男爵は存命中だったとはいえ、ビュルガーにとっては40年前を生きた軍人・ユンカーだった。

ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーは1747年、ハルツ山地の牧師の息子として生まれた。³⁸⁾ ミュンヒハウゼンとは大体親子ほどの年の違いがあることになる。ハレ大学で法律の勉強をしてハノーファー侯国内の封建領主ウスラーの代官となるが同家と諍いを起こす。その後、生活の苦勞を味わいながら学者の道を進み、ゲッティンゲン大学で美学・カント哲学を講じた。定収入のない資格であったために大変な窮乏の中で世を去ったとされる。さらに啓蒙主義者であり、フランス革命擁護に廻ったため、イギリスと同君連合であったハノーファーでは検閲官の監視下にあった。³⁹⁾ このような生涯を送ったビュルガーと貴族で軍人であったミュンヒハウゼンの間にはあまり共通するものがないように思われる。しかしビュルガーの創ったほら吹き男爵は市民層の意外に近くにいる。

ほら吹き男爵は軍務に就くためにロシアへ赴いた。従って旅の感傷もなく、関心は途中に出会う危険にどう対処し、チャンスをもどのようにものにするかに向けられた。「切り抜け“davonkommen”」で、「世の中でやりくりする術を身につけ」なければいけない。⁴⁰⁾ 状況と自分の間に有機的なつながりがあるわけではなく、従って手に入れるものは「幸運」である。⁴¹⁾ 新世界を開拓する代わりには、消極的な快樂原則がある。例えば次に要約する小咄の例である。「銃弾がなくなって桜の種を鹿の頭に打ち込んでしまった。一年か二年して同じ森で桜の木を頭に載せた鹿に出会った。結果はおいしいサクランボとチェリーソース付きステーキ肉」。⁴²⁾ これはキリスト教説話に出てくる十字架を載せた鹿のパロディーである。このように成功はささやかな幸運にすぎなくとも、あらゆる場所で状況を掌握する男爵こそが世界の中心である。理想へ上昇せずとも、数珠繋ぎに仕留めたカモにぶら下がり飛翔後、自宅の煙突経由で台所へ帰還する。⁴³⁾ 狩猟は食卓や家路へ結びつき、旅はドイツへ帰ることで終わる。『ほら吹き男爵』の副題が「友人に囲まれて一杯やりながら男爵自らいつも語ったことには」とあるように、追求されるのは多少の苦勞と幸運によって手に入れた居心地良さであった。

『ほら吹き男爵』の中でユンカーは「馬自慢ユンカー、狩り自慢ユンカー、犬自慢ユンカー」と皮肉られている。⁴⁴⁾ しかし、軍人として宮仕えをしているほら吹き男爵には悲壯感が漂う。次の行はトルコ戦役で功績を挙げた男爵のことばである。

属官には謙譲の徳があり、偉大な功績や勝利など我がものにしたいとは思わないものです。そういったものは日常の行いが何であれ指揮官や、おかしなことではありますがせいぜい演習の硝煙を嗅いだことがあるくらいの王様や女王様のおかげとなります。(.....)私たちは皆、責務を果たしました。これは愛国者、兵士、即ち勇敢な男子の表現としてはすべてを意味するのです。⁴⁵⁾

狩りの成功が食の欲望を満たすのに対して、軍人としての活躍は日常生活とは結びつかない経験となる。国王や指揮官こそ皮肉られるものの、軍人一般については共感や畏敬を持って語られる。18世紀の半ばにはミュンヒハウゼンの例に見られるように、高位の軍人でも国際的に活躍することができた。ロシア軍のみならず、フランス軍においてもオーストリア継承戦争を指揮したサックス元帥のようなドイツ人がいたのである。⁴⁶⁾ またそのような職業軍人は豊富な人間経験と知識を持ち、外国文化の受け皿ともなった。

軍人であるほら吹き男爵の周囲には機械と道具類が溢れている。狩猟には火縄銃、戦場には大砲。周囲の動物も機械仕掛けである。戦場を駆け回った男爵の馬は前半身・後半身に分かれ、それぞれに活躍した後、再び一体になる。⁴⁷⁾ 動物ばかりではなく人間もまた機械に近い。「酔っぱらわないロシアの將軍」話は以下のように要約される。「いつも決して酔うことのないある將軍のことを皆不思議に思っていた。実は戦争で頭の半分を失って以来、帽子の下に銀の蓋を被っていた將軍は、酒を飲みながら蓋を持ち上げてアルコール分を抜いていたのである。男爵をはじめ周囲の者が將軍の頭の後ろで点火したところ、後光がさし、將軍は即席聖人になった」。⁴⁸⁾ 悲惨な戦争を体現するグロテスクな姿であるにもかかわらず、この笑話ではのどかな世界が守られる。機械仕掛けについてのペシミズムはない。男爵の強靱な精神が常に自然界の法則をやすやすと乗り越えるからである。

沼を跳び越える話にその超人ぶりが見られる。第一話では沼を馬で飛び越す途中、距離が足りないと気がつき空中で馬首を転じてジャンプした地点に戻る。第二話、沼に落ちた後、掴まるものがないので仕方なく自分の髪房（当時は男性も髪を束ねていた）を掴み、足に挟んだ馬もろとも沼から身を起こす。⁴⁹⁾ ロシアの厳寒へ向かう旅で軽装だった上、着ていたコートを乞食に施してしまった話もキリスト教の慈愛の物語ではなく、軍人のやせ我慢のほらである。しかし、ほらではあっても、作者から悪意の目は向けられていない。啓蒙主義者ビュルガーは独裁君主を批判したが、軍人であるほら吹き男爵を明らかに自分たちの側に見出している。⁵⁰⁾

それではビュルガーの描く笑いは、笑いについての評論と照らし合わせたときどのように位置づけられるであろうか。

笑いは、笑われる者のみを対象にして解釈が試みられてきた。古くは、アリストテレスが『詩学』の中で「喜劇とは比較的劣悪な性格の人物の描写であり」、「おかしさは醜さの一つである」、「おかしさは他人に苦痛も危害も与えることのない欠陥であり醜悪である」としている。⁵¹⁾ 笑う者と笑いの対象は相互に関わりを持たない。むしろ交渉が成り立たないところに笑いが生じるのである。

啓蒙主義作家レッシングによれば、笑いは社会の約束事・常識を逸脱した者に対して浴びせられる。そして喜劇の有用性は笑う者にとってのみ存在する。

喜劇は笑いによって矯正する。(.....)喜劇の有用性は笑うことの中にある。喜劇は滑稽を発見する能力を育成するがゆえ価値があるのだ。情熱や流行の殻をかぶっていようと、どれほどの欠点や長所と結びついていようと、厳かでいかめしい戯れの中にさえ滑稽な要素を素早く見つけてしまう能力である。モリエールの『守銭奴』が世の中の守銭奴を矯正することはないだろう。(.....)しかし、喜劇は健常人をより健常にすれば充分である。守銭奴は気前良い者に教訓を与える。⁵²⁾

しかしレッシングは、笑われる者への一定の共感も笑いの条件としている。嘲笑と笑いはちがひ、笑われる者は全体としては善人であり、その一部にあるゆがみや逸脱が笑いの対象であるとされる。悪人は笑われるのではなく嘲笑される。

1900年に書かれたベルクソンの『笑い』も笑いの社会的な側面に着目しているといって良いだろう。笑いは、本来、自律的であるべき精神が性格上の原因か或いは一瞬の不注意のためにこわばり、

機械的なもの、物質的なものを露呈した時に起こるという。ここでもやはり笑いの持つ矯正力が問題となる。ベルクソンは、レッシングとは逆に笑われる者が矯正されるとしている。レッシングのいう嘲笑もベルクソンの笑いには含まれ、社会的な制裁として笑いが機能していることになる。⁵³⁾

上に挙げた三者とも、笑う者と笑われる者の間に距離があることを笑いの原動力としている。醜いことであれ、常識からの逸脱であれ、機械化・物質化であれ、なぜそのような現象が生じるかの疑問はおいて、目に映る現象そのものが笑わせるのである。

フランス風の社交になじむことができない武人であるほら吹き男爵への笑いは、軍人に特有の堅さとかわばりに向けられた笑いといっていいだろう。しかし、その笑いの根底にはレッシングの指摘する共感があり、ベルクソンの醒めた笑いはない。ベルクソンにおいて二律背反だった「物質化・機械化」と「生命」の対立がないのである。

機械との一体感はレッシングのいう「有用性」という価値基準に沿うものである。啓蒙主義者たちは迷信を遠ざけるため、⁵⁴⁾ 宗教界と戦ったが、『ほら吹き男爵』も「酔っぱらわないロシアの將軍」話や「桜の木を載せた鹿」の話などで宗教から笑いを得た。もちろん、不謹慎というにすぎない穏やかな笑いではあるが。代わって追求される価値は実利性、効用である。軍人ミュンヒハウゼンの活躍は啓蒙主義の価値観に根付いていると言えるだろう。

フランス式優美から程遠いほら吹き男爵はドイツの後発性・後進性を担う象徴でもある。立場が違ふビュルガーとほら吹き男爵を結ぶのは後進性における共通意識であるともいえる。この意識は、裏を返せば、フランス啓蒙家たちの先進意識と重なる。プロイセンのフリードリヒ大王に招かれたヴォルテールは宮殿のあったポツダムから出した手紙の中で、「ここはフランスにいるような気がする。人々はフランス語しか話さない。ドイツ語は兵隊と馬のためのものだ。」⁵⁵⁾ と述べた。ドイツ語についての同様の評価は『ガリヴァー旅行記』の中にも見られる。馬の国フーイヌムの馬が話す言葉は「ヨーロッパの言語の中では高地オランダ語またはドイツ語に似ていたが、それよりはずっと優美で意味も深かった」とされ、しかもこの評価はある王様の言葉に基づくものと断っている。⁵⁶⁾ 諸邦に分かれ、近代国家へのスタートに後れをとった18世紀のドイツは文化的にも低く位置づけられ、ドイツ人自身この評価を踏まえなければならなかった。そしてこのことは啓蒙思想の持つ普遍性とは逆行する「ドイツ的なもの」の探求へ向かわせる。啓蒙主義教育を受けながらも、ナポレオン戦争により一躍ドイツ・ナショナリズムに転じる文人の例としてハインリヒ・フォン・クライストを挙げることができる。

ほら吹き男爵に向けられた笑いは、遅れた国ドイツ出身のユンカーが狼と熊ばかりに会い、戦争では外交舞台に登場する代わりに大砲や鉄砲を相手にしなければならなかった「遅れた人」への笑いである。遅れていることを笑いとする点では騎士ドン・キホーテの笑いに近いが、ほら吹き男爵は往時の理想を求めて旅をしたわけではない。軍に入隊するためにロシアに出かけ、何とかやりくりをするという民衆に近い生き方である。

『ほら吹き男爵』の背景には戦争の絶えることのなかった殺伐とした時代がある。しかし啓蒙主義によって力を得た市民の生活者としてのたくましさや楽観主義が旅と冒険の全行程に溢れているの

である。

〔注〕

- 1) 本論文ではラスペ版は Erich Raspe : The travels and surprising adventures of Baron Munchausen, Hippocrene Books, UK, 1988.、ビュルガー版は Gottfried August Bürger : Wunderbare Reisen zu Wasser und Lande, Feldzüge und lustige Abenteuer des Freiherrn von Münchhausen, Insel-Verlag, Frankfurt a.M., 1968. を使用している。なお、本論の中で実在の男爵についてはミュンヒハウゼン男爵またはミュンヒハウゼン、本の名前は『ほら吹き男爵』、主人公はほら吹き男爵と記す。また意味の通る限り、男爵の称号のみとする。
- 2) Erwin Wackermann : Münchhauseniana, Verlag Fritz Eggert, Stuttgart, 1969. Ders : Münchhauseniana Supplement 1969-1978, Verlag Fritz Eggert, Stuttgart, 1978.
- 3) Erwin Wackermann : Münchhauseniana, S. 56ff.
- 4) Gero von Wilpert : Sachwörterbuch der Literatur, Kröner, 1979, Stuttgart, S. 527.
- 5) 藤代幸一編、『ドイツ民衆本の世界 1』図書刊行会、1987、巻末解説「ドイツ民衆本への招待」より。
- 6) Günter Mühlhordt : Halle-Leipziger Aufklärer als Lehrer und Anreger Gottfried August Bürgers-Sein Werden und Wirken in der Geisteswelt der Mitteldeutschen Aufklärung, In : G. A. Bürger und J. W. L. Gleim, hrsg. von Hans-Joachim Kertscher, Niemeyer, Tübingen 1996, S. 68ff.
- 7) 『啓蒙とは何か』カント、篠田英雄訳、岩波文庫、1997年
- 8) Ursula A. J. Becher : Geschichte des modernen Lebensstils, C. H. Beck, München, 1990, S. 75-81.
- 9) Eike Pies : Goethe auf Reisen, Kunst und Wohnen Verlag, Wuppertal, S. 43.
- 10) ebd. S. 718.
- 11) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1991, Bd. 27, S. 1662ff.
- 12) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, Bd. 21, S. 917.
- 13) 『英語語源事典』寺澤芳雄著、研究社、1997年、1457頁。
- 14) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, Bd. 21, S. 922. イギリス人、続いてアメリカ人旅行者について専ら使われた言葉であったとの記載が続く。
- 15) ebd. S. 916.
- 16) David H. Miles : Pikaros Weg zum Bekenner, Der Wandel des Heldenbildes im deutschen Bildungsroman, In : Zur Geschichte des Bildungsromans, hrsg. von Rolf Selbmann, Wege der Forschung Bd. 640, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1988, S. 378.
- 17) Laurence Sterne : A Sentimental Journey, Penguin Books, 1986, 34pp.
- 18) ebd. S. 36.
- 19) Eike Pies : a.a.O., S. 5.
- 20) Heinrich Heine : Sämtliche Schriften 2. Bd., Carl Hanser Verlag, München, 1995, S. 155.
- 21) 『オランダのロビンソン』(1721)、『ドイツのロビンソン』(1722)、『フランスのロビンソン』(1723)、『アメリカのロビンソン』(1724) 等々。Gero von Wilpert : Sachwörterbuch der Literatur, Kröner, 1979, Stuttgart, S. 688.
- 22) Jonathan Swift : Gulliver's Travels, Penguin Books, 1985, Chapter 12, 340pp.
- 23) Gottfried August Bürger : a.a.O., S. 33ff.
- 24) 以下の伝記についての記載は、Alida Weiss : Wer war Münchhausen wirklich ?, 1977, Bodenwerder/Weser に基づく。
- 25) Gottfried August Bürger : a.a.O., S. 13. 「ドイツの礼儀正しい郵便駅長」以下の行はラスペ版にはない。

- 26) 『カサノヴァ回想録』第10巻、ジャック・カサノヴァ、窪田般弥訳、河出書房新社、1995年、179頁。
- 27) 『ハノーファー』谷口健治著、晃洋書房、1995、182頁。
- 28) Thomas Brune: Von Nützlichkeit und Pünktlichkeit der Ordinari-Post, In: Reisekultur, C. h. Beck, München, 1991, S. 126.
- 29) John Noble: Baltic states & Kaliningrad, Lonely Planet, Hawthorn (Australia), 1994.
- 30) N. M. Karamzin: Letters of a Russian Traveler, Columbia University Press, New York, 1957, p 46.
- 31) Thoman Mann: Friedrich und die große Koalition, In: Thoman Mann. Gesammelte Bd. X, S. Fischer Verlag, 1960, 1974, Frankfurt a.M., S. 92.
- 32) ジャック・カサノヴァ、前掲書、196頁。
- 33) 前掲書、148頁。
- 34) Gottfried August Bürger: a.a.O., S. 15.
- 35) Grimmelshausen: Simplicissimus Teutsch, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1954, S. 450.
- 36) Gottfried August Bürger: a.a.O., S. 32. 史実では、アルハーンゲリスクでありシベリア流刑ではない。
- 37) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm grimm, Bd. 10, S. 2399ff.
- 38) ビュルガーの伝記は以下の書籍に基づく。Günter Häntzschel, Gottfried august Bürger, Beck'sche Reihe, C. H. Beck, München, 1988.
- 39) Günter Mühlpfordt: a.a.O., S. 68ff.
- 40) Gottfried August Bürger: a.a.O., S. 17, 21, 18.
- 41) ebd. S. 16, 17.
- 42) ebd. S. 19ff.
- 43) ebd. S. 18.
- 44) ebd. S. 23. この皮肉はラスベ版にはない。
- 45) ebd. S. 27.
- 46) 『旅・戦争・サロン』180頁。
- 47) Gottfried august Bürger: a.a.O., S. 28ff.
- 48) ebd. S. 15ff. 「酔っぱらわないロシアの将軍」はビュルガーが付け加えた話である。
- 49) ebd. S. 30.
- 50) 「農民一独裁君主に寄せて」(1773) Zit. In: Günter Häntzschel, Gottfried August Bürger, a.a.O., S. 70.
- 51) アリストテレス: 世界古典文学全集16、田中美知太郎訳、筑摩書房、昭和41年、15頁。
- 52) Gottfried Ephraim Lessing: Hamburgische Dramaturgie, Insel Verlag, Frankfurt a. M., 1986, S. 142.
- 53) 『笑い』ベルクソン著、林達夫訳、岩波書店 1987。
- 54) ライプチヒ・ハレ大学の教授であったトマジウスは魔女狩りをなくすために論陣を張った。ドイツで最後の魔女焚刑が行われたのは1775年とされる。Silvia Bovenschen: die imaginierte Weiblichkeit, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1979, S. 95.
- 55) 1750年の手紙。Zit. In: Max von Boehn, Die Mode, Eine Kulturgeschichte vom Barock bis zum Jugendstil, Bd. II, Bruckmann, München, 1996, S. 9.
- 56) Jonathan Swift: a.a.O., S. 280.

Münchhausens Geschichten —Reisen und Lachen in der Aufklärungszeit—

Setsuko Ichida-Kakimoto

Die phantastischen Geschichten des Lügenbarons Münchhausen, auch in Japan bekannt, gründen sich auf einer historischen Gestalt, Hieronymus von Münchhausen (1720–1797). Von seinen Reisen und Abenteuern wurde bis heute als Münchhausiana immer wieder aufs neue erzählt, so daß man sich unter diesem Titel nur Phantastereien vorstellt. Jedoch in der Originalausgabe war die Verbindung der Geschichten und dem historischen Münchhausen viel enger.

Im 18. Jahrhundert gewannen die Bürger an Macht, indem sie Aufklärungsideen aufnahmen. Der Unterschied des Lebensstils zwischen Adel und Bürger verringerte sich. Das zeigte sich nicht nur im Alltag wie, was man ißt, sondern auch darin, daß immer mehr Leute aus Lust und als Freizeitbeschäftigung reisten. Das spiegelt sich in der damals populären, phantastischen Reiseliteratur wieder.

Der geschichtliche Münchhausen unternahm in der Tat eine Dienstreise nach Rußland. In G. A. Bürgers "Lügenbaron" erzählt man von verschiedenen Bedingungen, die die Reisen von damals beschwerten — Wetter, unwegsame Wege und schlechter Kundendienst —. Die Lage vom wirklichen Münchhausen als Deutscher in Rußland wurde auch mit erwähnt. Die Deutschen übten in Rußland als Experten einigermaßen Macht aus, wurden aber beim Machtwechsel ausgeschlossen.

Das Lachen über Münchhausen liegt erstens in seinem Erfindungstalent und seiner übermenschlichen körperlichen Kraft. Er erschien dann als erfahrener Militär. Er verkörperte aber auch Rückständigkeit von Deutschland im allgemeinen. Die Unterentwicklung war den Deutschen bewußt. Man führte die Aufklärungsideen ein, mußte aber von der Besonderheit der deutschen Umstände behaupten. Der Aufklärer G. A. Bürger konnte sich wegen dieser Diskrepanz zwischen Aufklärung und Rückständigkeit mit dem altmodischen Baron Münchhausen vereinigen.

Key Words : Aufklärung, Reise, Lügenbaron, Lachen, Militär